

會津八一とその藝術

植田重雄著

會津八一とその芸術

植田重雄著

早稲田大学出版部

植田 重雄（うへだ しげお）

静岡に生まる。早稲田大学文学部卒。

現在早稲田大学教授。専攻—哲学。

主なる著書・訳書：

歌集「鎮魂歌」（槻の木会刊），同「存在の岸边」（河出書房），「会津八一短歌とその生涯」（文芸春秋），「旧約の宗教精神」（早稲田大学出版部），ボーマン「ヘブライ人とギリシア人の思惟」（新教出版社），ブーバー「歴史はスメールに始まる」共訳（新潮社），その他。

現住所—東京都練馬区上石神井1—28

昭和46年 4月30日初版発行

會津八一とその芸術

¥ 1,800

著 者 © 植 田 重 雄

発 行 者 荻 原 益 次

印 刷 所 財団法人印刷局朝陽会

発 行 所 東京都新宿区 早稲田大学出版部
戸塚町1—58

郵便番号 160 電話 東京 (203)1551 振替 東京 1123

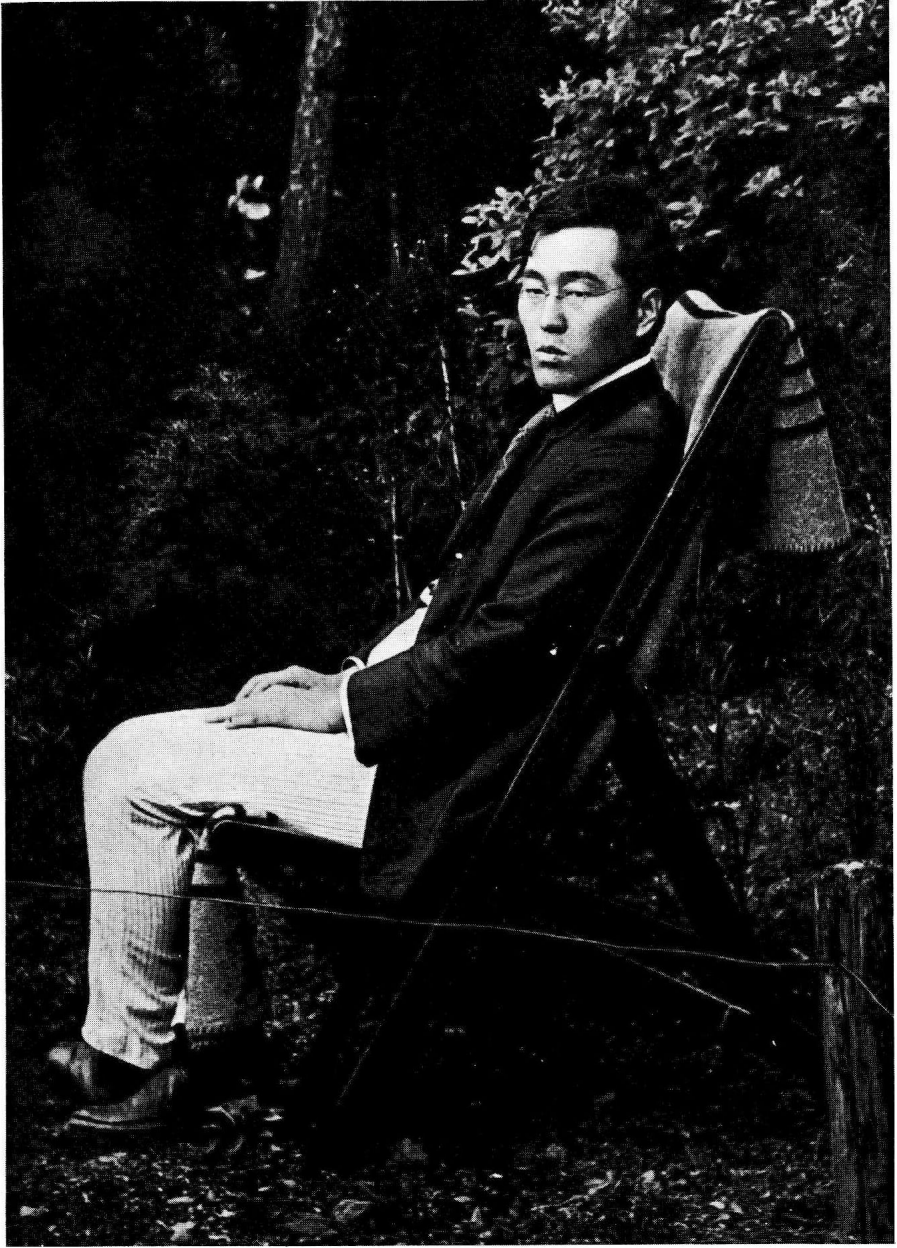
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

製本・東栄社

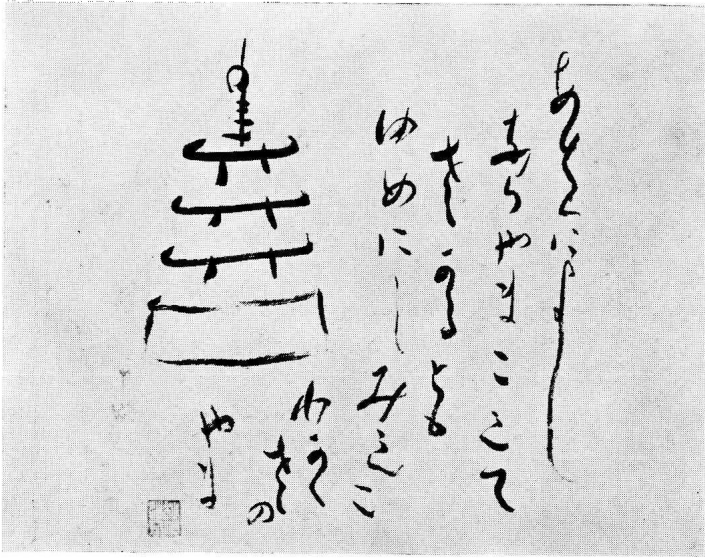
1091—3137—9314



新潟市寄居浜海岸（昭和22年4月13日撮影）



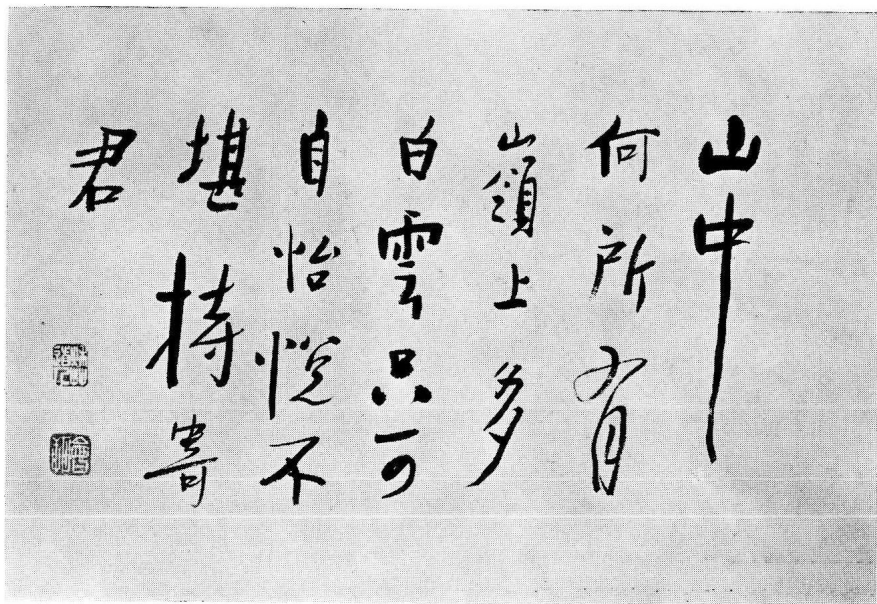
板倉町針・有恒学舎にて（明治41年6月撮影）



百万塔と南京詠一首（本文58頁参照）

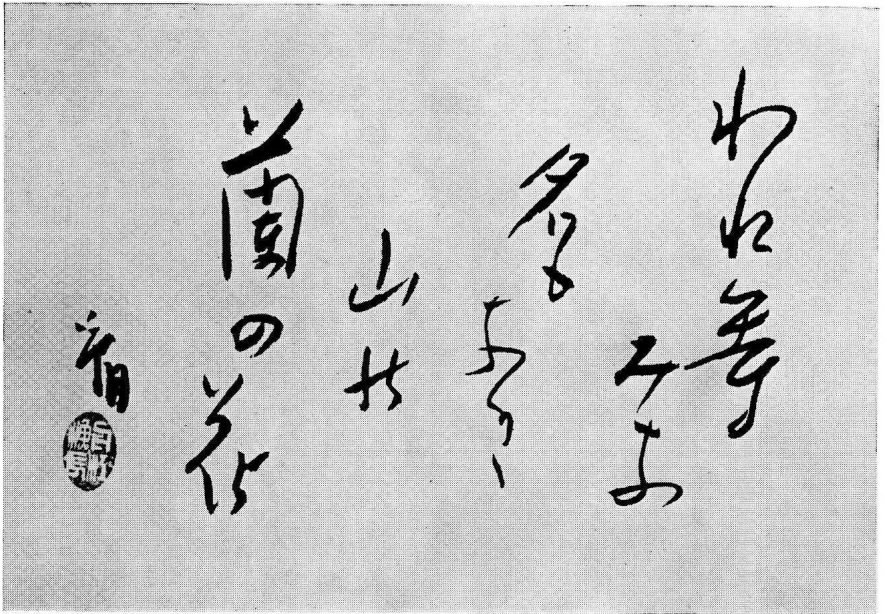


板倉町針の冬景色



秋州道人浴泉詠草中の陶弘景の詩（本文262頁参照）





長相思帖の自句（大正7年3月）



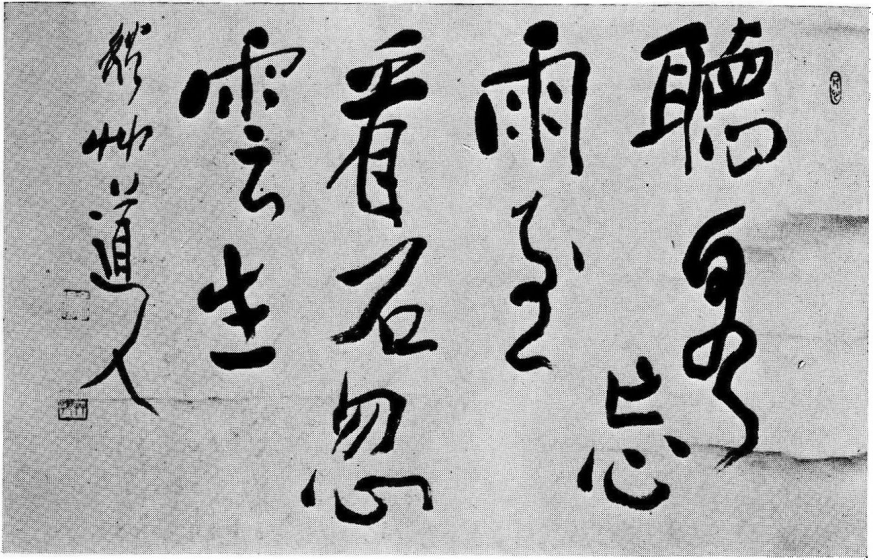
桃李言ハザレドモ下自ラ蹊ヲ成ス

文選古詩19首中の第8篇
 (本文302頁参照)

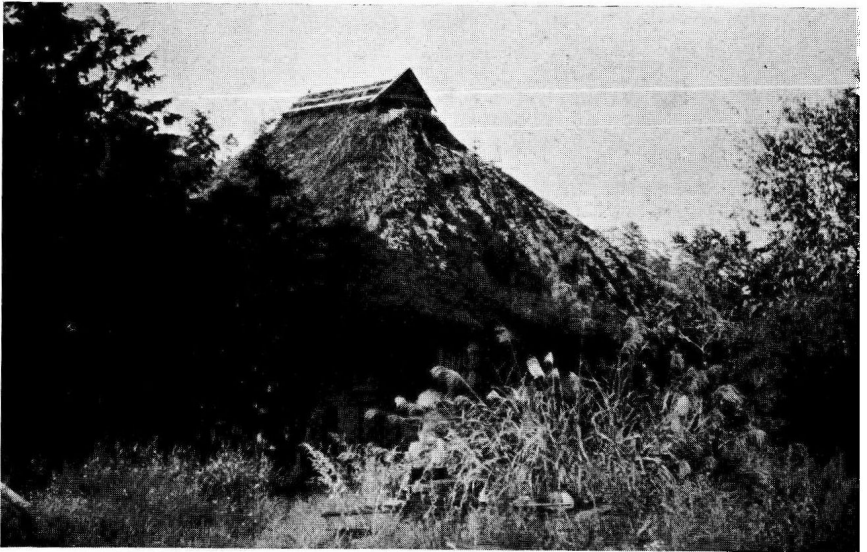
冉、孤生竹結根泰山阿與君
 為新婚鬼絲附女蘿鬼絲生
 有時夫婦會宜千里遠
 結婚似、隔山陂思君令人
 老軒車——未何濟傷教黃心
 蘭若含英揚芳輝過時而不
 采將隨於草萎君亮執高
 節賦妾亦何為

法修、手を閉じて思ひに
 前、未だ春の興を
 提げし、碩よの語不
 福、調の器中、語不
 而、調よに、す刺、
 惜、その、
 心、清、水、み、
 心、に、ゆ、ぎ、外、無、え、折
 角、も、の、
 此、速、記、ある、
 此、速、記、ある、
 此、速、記、ある、

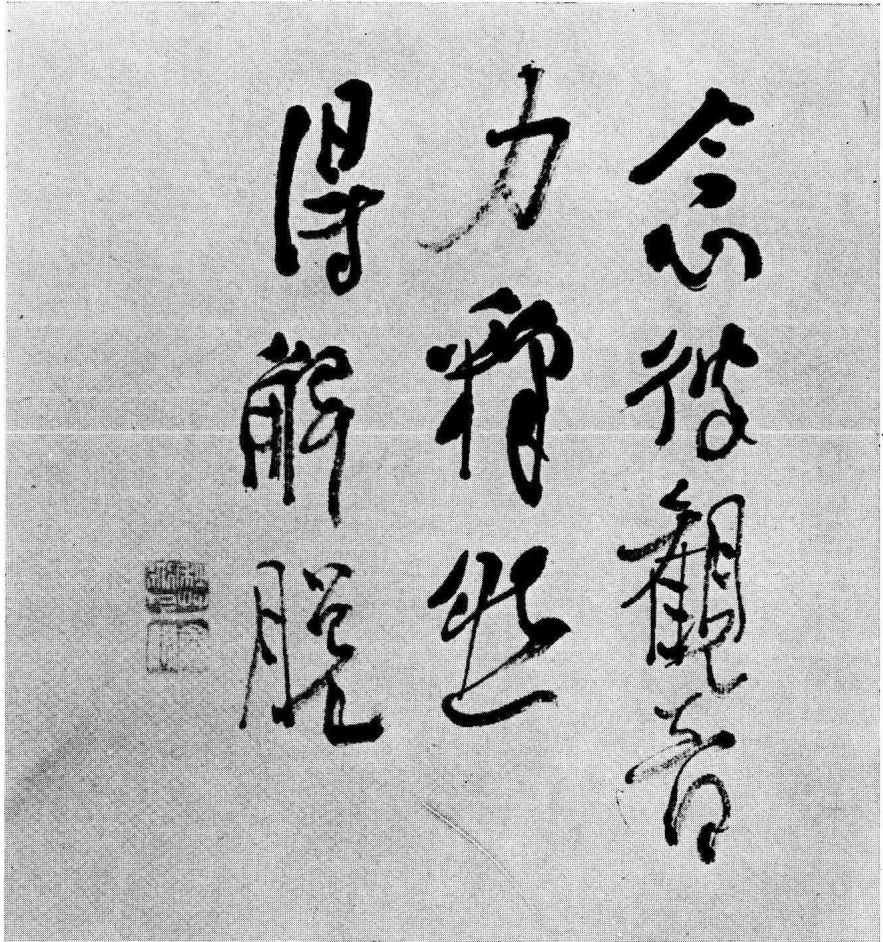
渡辺湖畔宛書簡の一部 (昭和6年7月21日付)



泉ヲ聽イテ雨ノ至ルヲ忘レ，石ヲ看テ雲ノ生ズルヲ忽ル



観音堂跡（中条町，昭和42年9月20日撮影，本文72頁参照）



彼ノ觀音カラ念ズレバ釈然トシテ解脫ヲ得（吉池本觀音堂一部）

目次

口
絵

I 芸術に対する態度と短歌の特質……………一

虚名の棄却……………一

人間性と趣味……………三

自己愛と学規……………九

精進と自己批評……………一五

「游於芸」の境……………二五

短歌の態度……………二九

美の感受性と純粹感情……………三四

II 短歌作品とその変遷……………四

鹿鳴集の世界……………四

南京新唱(四二) 南京余唱(五九) 南京続唱(六〇) 観仏三昧(六三) 自然

と人の世界(六四) 村莊雜事—平淡の世界—(六五) 九官鳥(六六) 歌格に

ついで(六七)

山光集の世界……………六

寒燈集の世界……………七

渾融の世界(七二) 苦難と透過の問題(七五)

美の創造と向上の道……………九

美の創造について(七九) 向上の道(八二)

III 人間性と学問・芸術の土壌……………七

若き日の愛……………七

フェノロサと小泉八雲……………一〇

ロマンティシズムとギリシア……………一〇

蕪村と秋艸道人……………二八

中国の文学と秋艸道人……………三三

IV 趣味と学問の成熟……………三三

星辰と芸術観……………三三

鼎坐の書信……………三三

学問の態度と研究の展開……………三五

郷土玩具の収集……………三六

病気について……………一四〇

教祖的性格……………一四三

早稲田中学教頭の頃と奈良美術研究の出發……………一四四

奈良美術研究会の創立と室生寺大觀の撮影……………一四五

「奈良美術史料」と「東洋美術」……………一五五

東洋美術史学会の設立……………一六〇

瓦の研究……………一六六

V 艸堂閑話……………一六九

書について……………一六九

會津伝説の一つ……………一七七

北川蝠亭と友情論……………一七九

艸堂閑話……………一八

VI 俳句と短歌……………一九九

初期の俳句作品……………一九九

俳句の郷土性……………二〇〇

師弟合璧帖……………二二

VII

初期の短歌の習作	三五
相聞歌と新しき短歌の誕生	三六
短歌における俳味について	三三
しらべと推敲	三三

短歌の言葉

「かも」と「かな」	三三
-----------	----

短歌の「しらべ」の問題

ひらがな書き	三六
--------	----

「鹿鳴集」の作品と推敲

「印象」の歌	三四
--------	----

VIII

精神の契合

「山中高歌」について	三一
------------	----

良寛禅師と秋艸道人

坪内逍遙と秋艸道人	三六
-----------	----

題材としての仏像

宗教心	三〇
-----	----

雅号のこと

あながき	三〇
------	----

I 芸術に対する態度と短歌の特質

虚名の棄却

秋叶道人 會津八一の芸術に関して、その生涯の全体において共通している根本的な態度やものの見方がどのようであったのか。とくに短歌と書に目ざした価値と特質、人間観、文明観などについて考えてみたい。これらのことは、すべてひろく浸透している全人的な問題であることはいうまでもない。さらに、明治・大正・昭和の三代に生きてなした道人の芸術の位置を明らかにするものである。この考察のあとで、個々の作品やそれに関連する多くの諸問題にふれることにしたい。

明治三十三年頃、弱冠十八歳の道人が、越後俳壇で子規に呼応して新しい俳句運動に加わり、ついに東北日報・新潟新聞の俳句撰者となつて、八面六臂の華々しい活躍をしたこの青年時代は、句作のほかに、俳論も、評釈も、さらに短歌も詠んでおり、道人の芸術活動の発端として記念すべきものである。ところが、晩年、「鹿鳴集」の編纂のとき、この時代の俳句や短歌の作品を、一顧にも値しないものとしてすべて棄てている。やがて、大学を卒業し、有恒学舎に赴任したのち、明治四十二年頃、越後俳壇の頃を回想し、自己の態度をつぎのように

批判する。「止むを得ず自分は、右の手に自家の怪しげな鈍刀を揮つて、左の手の腫物を自分で裂いた。膿血流るゝこと三斗、自ら別人となつたかの感を禁じ得ぬ」(我が俳諧)。さらにまたいう。「我が輩は十年間俳諧を宣伝した其意は、此の越後の地に於いて起るべき新しき天才を喚び起さんが為めであつた。而して此の志は一の虚名によつて酬いられたのである。若し世上の賢明なる文士諸君の如く、原稿を売つて衣食する身でもあらば、虚名頗る妙であらう。……然らずんば、一個人の虚名を貪らんよりは、堅く門を謝して、一個人としての修養に努めた方がいゝと思ふ」(俳句を募るにつきて)。たしかに、越後俳壇の中心的存在となるべき力量を道人はもつていたし、その作品は、二十歳前後の青年とはおもえぬ才氣と情熱を發揮したものである。それとともに多くの俳友を得た。しかし、その十中八九は、俳句に狎れてしまうと、向上心を失ひ、マンネリズムにおちいり、折角、改革を目ざした文学運動も、いつしか社交のもてあそびになつていった。道人は向上心を失つた俳友をみて嫌悪した。同時に、その中でもてはやされている自己の才氣を虚名と断定したのである。この虚名はさしたるものではない。致命的なものではなかつたが、しかし、自ら深く反省して、虚妄のものとして剔抉を行なつたところに、道人の勇らしい批評精神があつた。

學問芸術にたずさわる者にとつて、虚名ほどおそるべき陥穽はない。そしてまた、虚名、空名ほどあまい誘惑の力をもつたものは、ほかにない。しかしこの幻影をすすんで求め、その勢いで世の中を乗り切ろうとする人、虚名の上に虚名を重ねて、身を亡ぼす人の数は多い。道人はすでに二十八、九歳で、決然として、自己の芸術への態度をそのようなどころから、拒絶したのである。この拒絶とともに、さまざまの芸術にたいする態度をも反省していった。それゆえ、この孤独の有恒學會時代の虚名の棄却こそ、道人の芸術や一切の人生態度の新しい出発点である。虚名の誘惑はこれですべて終つたわけではなく、生涯にいくたびか起こり得たことであろうが、道